

J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第8番 ヘ長調 BWV 794 —

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 ヘ長調 BWV 772³⁾」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ヘ長調 BWV787」から「第7番 ホ短調 BWV 793」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第25号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第8番 ヘ長調 BWV 794」を取り上げたものである。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミーダーによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 8」は、わずか23小節で構成された曲である。その小曲に、テーマが21回も現れ、多数のストレッタがあるが、重厚さや緊張感よりも軽やかさや快さを感じさせる曲である。「W.F.バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 8」にあたるのは、52番目の曲で、「Fantasia 4」(BWV 794)と題されている。双方には、表Iに示したような、違いが見られる。

表I 「Sinfonia 8」と「Fantasia 4」の相違箇所

Sinfonia 8	Fantasia 4
② ⁵⁾ 上声3拍め Fis音 ⁶⁾ 上に ♪	② 上声3拍め Fis音上に装飾記号なし
③ 下声3拍め B音上に ♪	③ 下声3拍め B音上に装飾記号なし
④ 下声2拍め F音 E音 F音 D音	④ 下声2拍め F音 D音
④ 下声4拍め G音 F音 G音 E音	④ 下声4拍め G音 E音
⑤ 下声2拍め A音 G音 A音 F音	⑤ 下声2拍め A音 F音
⑦ 下声3拍め C音 C音	⑦ 下声3拍め C音
⑬ 下声1拍め E音 D音 E音 F音	⑬ 下声1拍め E音 D音
⑬ 下声2拍め E音 D音 E音 C音	⑬ 下声2拍め E音 C音
⑬ 下声3拍め F音 F音	⑬ 下声3拍め F音
⑭ 下声1拍め G音 F音 G音 A音	⑭ 下声1拍め G音
⑭ 下声2拍め G音 B音 A音 C音	⑭ 下声2拍め 八分休符 A音 F音
⑮ 下声3拍め B音 C音 B音 A音	⑮ 下声3拍め B音
⑮ 下声4拍め G音 A音 B音 G音	⑮ 下声4拍め 八分休符 B音 G音
⑯ 下声3拍め B音 C音 A音 C音	⑯ 下声3拍め B音 C音 A音 B音
⑯ 下声4拍め B音 A音 B音 G音	⑯ 下声4拍め G音 A音 B音 G音
⑰ 下声2拍め C音 B音 C音 A音	⑰ 下声2拍め C音 A音
⑰ 下声4拍め D音 C音 D音 B音	⑰ 下声4拍め D音 B音
⑲ 下声2拍め B音 C音 A音 B音	⑲ 下声2拍め B音 A音
⑲ 下声3拍め G音 A音 B音	⑲ 下声3拍め G音 C音 B音

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の『「インヴェンション」について』の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例：第4小節め→④，第3小節めから第10小節め→③~⑩。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例：変ロ音→B音，嬰ヘ音→Fis音。

楽 曲 分 析（譜1^{7）} 参照）

この曲は、四つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	①～⑦ (6.5)	第2部	⑦～⑪ (4)
主 題	①～③ (3)	主 題	⑦～⑪ (4)
間奏1	④～⑤ (1.5)		
主 題	⑤～⑦ (2)		
第3部	⑪～⑮ (4)	第4部	⑮～⑳ (8.5)
主 題	⑪～⑭ (3)	間奏2	⑮～⑰ (2)
結 尾	⑭～⑮ (1)	主 題	⑰～⑱ (2)
		間奏3	⑱～⑳ (1.5)
		主 題	㉑～㉓ (3)

各部分における楽曲分析

第1部

主 題

- ①
 - ・①上声部は、全休符である。
 - ・①中声部には、八分休符の後、3度跳躍下行する十六分音符二つと順次下行する八分音符三つからなる要素(a)と、要素(a)に装飾的に非和声音をつけた七つの十六分音符からなる要素(a')で作られたテーマ(T)がある。
 - ・①下声部には、(T)に対する対旋律(G)がある。この(G)は、主音も導音もない(T)を和声的に支える役目を担っている。この後に現れる(G)は、様々に形を変化させて、その目的を果たしている。ここでは、四分音符・二分音符・四分音符・八分音符でF dur⁸⁾の主音・主音・導音・主音を鳴らしている。
- ②
 - ・②上声部には、(T)がある。(a)の出だしは、3度跳躍下行から2度順次下行に変化している(a'')。この(T)は、C durに納まる。
 - ・②中声部には、(G)がある。この(G)は、出だしが変化し(Gv1)、C durの主音・導音・主音を鳴らしている。
 - ・②下声部には、(a)の断片を使って音の動きを変化させた音形(a/)がある。②後半は、C durのカデンツ(K)に入り、転調を確立している。
- ③
 - ・③上声部には、(G)がある。この(G)は、出だしが変化し(Gv2)、F durの主音・導音・主音を鳴らして、C durからF durに戻ったことを明確にしている。

7) この小論における「Sinfonia 8」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大字は長調、小文字は短調を表わす。
例、ハ長調→C dur あるいはC:, イ短調→a moll あるいはa:.

- ・③中声部は、F durの音階を順次下行・順次上行させ、急激な転調の確立を助けている。
- ・③下声部には、(T)がある。この(T)は、①中声部の(T)を1オクターブ下で、忠実に再現している。

間奏1

- ④～⑤・④～⑤上声部と中声部は、(a)の断片を利用した音形(a/)をゼクエンツさせ、かつ、交互に配し、掛け合いを行っている。
- ・④～⑤下声部は、(a')の後半のリズム生かし、カデンツ風に音の動きを変化させた(a'k)を3回ゼクエンツさせ、上声部と中声部の掛け合いに、より躍動感を与えている。

主 題

- ⑤～⑦・⑤～⑦上声部は、下声部に(T)がある所では、オブリガートの自由に音を鳴らしている。中声部に(T)があるところでは、(G)となっている。この上声部の(G)は、出だしが変化し(Gv4)、C durの主音・導音・主音を鳴らしている。
- ・⑤～⑦中声部は、下声部の(T)に対する(G)があり、それに続いて(T)が置かれている。この中声部の(G)は、リズム的に大胆な変化が加えられている(Gv3)が、C durの導音・主音をかろうじて鳴らし、(G)の責務を果たしている。続く(T)は、先行する下声部の(T)を1オクターブ上で、忠実に繰り返している。
- ・⑤～⑦下声部は、C durで(T)を奏でた後、(a/)を使ってC durの(K)を形作り、第1部を終わらせている。

第2部

主 題

- ⑦～⑩・⑦～⑩上声部は、⑦3拍目から⑩3拍目まで、間をおかずに3回(T)がある。(T)は、C durからめまぐるしく転調をしてg mollに至っている。
- ・⑦～⑩中声部は、休止である。
- ・⑦～⑩下声部は、上声部から1拍遅れて、ここも間をおかずに3回(T)がある。ただし、3回目の(T)の後半の(a')は、音形が変化している。上声部と下声部の(T)は重なり合い、ストレッチとなっている。また、下声部は、1拍遅れて上声部を5度下で追い、カノンとなっている。
- ⑩～⑪・⑩～⑪上声部は、中声部の(T)に対する(Gv5)で、(G)の頭部が少々変化して、g mollの主音・導音・主音を鳴らしている。
- ・⑩～⑪中声部は、第2部最後の(T)をg mollで奏でている。
- ・⑩～⑪下声部は、g mollの(K)の動きをして、第2部を終わらせている。

第3部

主 題

- ⑪～⑭・⑪～⑭上声部は、下声部の二つの(T)に対する(Gv6)と(Gv7)の後に、(T)がある。
 (Gv6)も(Gv7)も、大きな変化が加えられ、主音・導音・主音の動きにはなっていない。ここで、g mollからd mollに転調している。
- ・⑪～⑭中声部は、(a)から派生した二つの音形の後、d mollの音階音を順次下行して、d mollへの転調を明確にし、上声部の(T)に対す(Gv8)に繋がっている。この(Gv8)は、変化はしているもののd mollの主音・導音・主音を鳴らしている。
 - ・⑪～⑭下声部は、①～②中声部(T)と上声部(T)と同じ関係にある(T)を配置し、①～②と同じように、属調に転調している。(T)の後には(K)が続き、偽終止している。

結 尾

- ⑭～⑮・⑭～⑮上声部は、偽終止を仕切り直すかのように(K)に入り、D音に終止している。
- ・⑭～⑮中声部も(K)に入るが、掛留音に留まり、上声部と下声部に半拍遅れてF音に終止する。
 - ・⑭～⑮下声部も(K)に入り、D音に終止して第3部を終えている。

第4部

間奏2

- ⑮～⑰・⑮～⑰上声部は、(a)の断片(a/)を十六分音符と付点四分音符の組み合わせと、十六分音符と八分音符の組み合わせの二つのリズム型を交互において、4回鳴らしている。
- ・⑮～⑰中声部は、上声部同様(a/)を3回鳴らしているが、上声部のような規則的なリズムで動いてはいない。
 - ・⑮～⑰下声部は、⑮の(a'k)と⑮から⑰にかけての(a/)以外は、比較的自由的な動きをしている。⑮から⑰にかけての(a/)は、中声部の(a/)の3度下で、重なっている。この間奏の間に、d mollからF durを経てB durに転調している。

主 題

- ⑰～⑲・⑰～⑲上声部は、B durで(T)が2回出ている。⑰から始まる上声部の(T)は、中声部の(T)と重なり、(T)の二重化がなされている。二重の(T)の主となるのは、中声部の(T)であり、上声部の(T)は、中声部の主たる(T)の6度高い音を鳴らしている。⑱から始まる上声部の(T)は、⑰から始まる中声部の主たる(T)の1オクターブ上の音を鳴らし、上声部は、ここで主たる(T)の位置を得ている。
- ・⑰～⑲中声部は、B durで(T)が1回出た後、B durの音階音で長音を含んで順次下行し、主音に落ち着いている。

- ・ ⑰～⑲下声部は、B durの主音を長くのばした後、十六分音符でつなぐようにして、上声部の(T)にストレッタの状態、(T)に入っている。この下声部の(T)の後半部分は、次の間奏部分に食い込んでいる。

間奏3

- ⑱～⑳・ ⑱～⑳の間奏3は、③～⑤の間奏1を上声部と中声部を入れ替えて、また、C durをF durに移して、同じことをしている。
- ・ ⑱～⑳上声部は、(a)の断片(a/)を2度ずつ上行させて3回ゼクエンツしている。この間、B durからF durに転調している。
- ・ ⑱～⑳中声部は、上声部と同様、(a)の断片(a/)を2度ずつ上行させて3回ゼクエンツしている。この中声部のゼクエンツは、上声部より1拍先行して始めており、上声部と掛け合いとなっている。
- ・ ⑱～⑳下声部は、前の主題部分の残りの(T)を奏した後、(a'k)を、これも2度ずつ上行させて、3回ゼクエンツしている。3回目は、変形して次の主題の頭となっている。

主 題

- ⑳～㉓・ ㉑～㉓の主題は、⑤～⑦の主題を上声部と中声部を入れ替えて、また、C durをF durに移して、ほぼ同じことをしている。
- ・ ㉑～㉓上声部は、下声部の(T)に対する(Gv9)に続き、1中声部の(T)と全く同じように、また、直前の下声部の(T)の位置オクターブ上で(T)鳴らし、(K)に入ってF durの主音に落ち着き、曲を閉じている。
- ・ ㉑～㉓中声部は、⑤～⑥上声部で鳴らされたオブリガートの音形を、鳴らした後、上声部の(T)に対する(Gv10)に続き、上声部と同じF音に入って曲を終えている。
- ・ ㉑～㉓下声部は、1中声部の(T)の1オクターブ下で(T)を鳴らした後、十六分音符でつなぐようにして、(a)の断片(a/)を利用した音形を2回ゼクエンツする形の(K)を通して曲を閉じている。

演奏解釈（譜2参照）

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表Ⅱのような指示をしている。

表Ⅱ 諸校訂版における「Sinfonia 8」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicshoff	Allegretto ♩ = 80
Ferruccio Busoni	Allegretto vivace
Alfredo Casella	Allegro giocoso
S.A.Durand	Allegro moderato
James Friskin	Allegretto poco giocoso ♩ = 80
Vilem Kurz	Allegretto
Wm.Mason	Allegro moderato
G.E.Moroni	Allegro moderato ♩ = 92
Bruno Mugellini	Allegretto con brio ♩ = 80
Julius Rötgen	Allegretto ♩ = 76
井口基成	Allegretto vivace
千倉八郎	Allegretto ♩ = 76

また、内外11人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 8」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1'14"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1'09"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	0'58"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1'23"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	0'59"
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	1'15"
田村 宏	不明	ピアノ	1'08"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1'07"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1'23"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	1'09"
Don Dorsey	1985年	シンセサイザー	1'02"

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

どの演奏家も1分前後の演奏時間で、著しくテンポの違う演奏はない。しかし、それぞれ演奏家の個性がよく出ている演奏であった。遅めのテンポで演奏している4人も、チッコリーニは堂々と、ニコラエヴァはノンレガートを強調してゆったりと、レオンハルトはゆったり落ち着いて、高橋は穏やかに、と違った雰囲気を醸し出していた。1分を切った演奏の2人も、グールドは軽快に、シェフは八分音符の跳躍進行を強調して、表情の異なる演奏をしていた。ヴァルヒャは、澁刺とした躍動感のある演奏をしており、筆者のチェンバロ観を変えるほどの強い印象を得た。

筆者は、「Allegretto ♩=76」というテンポをとり、装飾音符を含め、ストレッチで出現するテーマを丁寧に歌う演奏をしたい。

アーティキュレーション

表Ⅲにあげた演奏は、十六分音符もノンレガートで演奏しているものが多かったが、筆者は、十六分音符はレガートに奏す。指示のない八分音符は、ノンレガートである。区切りをつけたいところには、(|) を付した。

装飾音

「Sinfonia 8」(BWV 794) には、テーマの前半の終わりの八分音符にある装飾音が三カ所しか付されていない。他のテーマの同じ音に当たるところの装飾音は、省略されていると思われる。他のテーマもこの三ヶ所と同じように装飾音符をつけて演奏する。

各部分における演奏解釈

- ①～③・全体に、軽やかさを楽しみたい。各テーマのクライマックスは、三つめの音にあたる八分音符に置く。クライマックス後のテーマは、軽さを愛でるように納める。
- ・①中声部の(T)は、*mf*で健康的に弾き出す。下声部(G)は、音符の長さを意識してテヌートした太い音でテーマを支える。
 - ・②上声部の(T)は、①中声部の(T)のエコーのように美しく鳴らす。
 - ・③下声部の(T)は、低音の太さよりも軽さを意識し、③の終わりは、少々*dim.*して、(T)の提示を終える。
- ④～⑤・間奏は、*mp*で始める。
- ・上声部と中声部の掛け合いは、上声部の音の中声部の音がエコーのようにして追いかける。音の上昇に沿って、*cresc.*する。
 - ・下声部は、十六分音符と八分音符の組み合わせのリズムを楽しむように軽く流す。
- ⑤～⑦・⑤～⑥下声部の(T)は、少し落ち着きのある音で奏し、第一部の終わりに向けて、少々*dim.*していく。
- ・⑤～⑥上声部と中声部は、ゼクエンツの塊毎に、少々*dim.*して下声部の(T)添う。
 - ・⑦のカデンツは、*dim.*の仕上げをするように音を納め、*mp*にもっていく。
- ⑦～⑪・第2部は*mp*で始める。ここは、ストレッチで(T)が重なり合い、音が上昇していく。また、転調もめまぐるしい。その緊張感を*cresc.*で充分表したい。⑨上声部4拍目に前半最大のクライマックスがある。クライマックスを豊かに鳴らした後は、落ち着きを取り戻し、第2部の終わりに向かって、*dim.*する。
- ⑪～⑮・第3部は*mp*で始める。この主題の部分は、他の部分とは趣を変えて、骨太な音の響きと動きを楽しみたい。
- ・⑪～⑫下声部の(T)は、一番低音の(T)である。軽やかさよりも、音の太さを大切に音を鳴らす。
 - ・⑫～⑬上声部と中声部の動きは、少しマルカート気味にして、十六分音符を含まない動きの落ち着きを表現する。
 - ・⑭は、偽終止を充分意識して結尾に入る。
 - ・⑮のカデンツは、ほんの少々テンポをゆるめて、静かに納める。
- ⑮～⑰・第4部の⑮～⑰間奏は、④～⑤間奏と同じように、中声部と上声部で掛け合って、*cresc.*する。ただし、ここでは、上声部がエコーとなる。しかし、⑯3拍目から4拍目にかけての上声部は、エコーではなく主張するように音を豊かに出す。
- ⑰～⑲・⑰～⑱二重テーマは、中声部を主たる(T)として音をよく響かせ、装飾音も中声部に付ける。⑲～⑳上声部(T)は、全曲最大のクライマックスのある(T)である。クライマックスのG音に向けて*cresc.*する。*f*で豊かに響かせた後、⑲間奏の前で、少々*dim.*する。
- ⑲～⑳・⑲～⑳間奏も、④～⑤間奏と同じように、中声部と上声部で掛け合って、*cresc.*する。ただし、逆エコーにして、追いかける上声部の方が強い音にする。

- ⑳～㉓・㉑～㉓最後の主題部分は、㉑～㉓間奏の*cresc.*が登り切った*f*から始まる。
- ・㉑下声部（T）は、マルカート気味に堂々と奏す。続く㉒上声部（T）も、下声部のマルカートを受け継ぐように堂々と鳴らし、最後の（K）に入っていく。
 - ・㉓（K）は、テンポをゆるめ、これも堂々と奏して、曲を閉じる。

おわりに

「Sinfonia 8」は、わずか23小節の曲の中に、21回もテーマが出現する。ストレッタ部分も多く緊張度も高いが、不思議に軽やかさが漂っている。テーマが出現しない間奏部分の美しさが際だっている。短い間奏にしばしの憩い求めているようで、面白い。高層ビルが林立するオフィス街の中にある小さな公園の緑のように、ほっと息をつきたくなるな美しさがある。

参考文献・参考楽譜・参考CD

*参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
- ・山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

*参考楽譜

原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979)
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972)
- ・J.S.BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933)
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂(カワイ出版 1983)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編(音楽之友社 1965)

校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
- ・BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G.Schirmer, New York 1967)
- ・J.S.BACH 「Dreistimmge Inventionen」Ferruccio Busoni (Breitkoph&Haltel Weisbaden)
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」James Friskin (J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmge Inventionen (Sinfonien)」Alfred Kreutz (B.Schott's Sohnen Mainz 1950)
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TRĚHLASÉ SINFONIE」Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
- ・BACH 「Three-Part Inventions」WM.Mason (G.Schirmer Inc New York 1967)
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」G.E.Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
- ・バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成(春秋社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション」(音楽之友社 1955)
- ・バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編(全音楽譜出版社)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・J.S.バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳(全音楽譜出版社 1972)

*参考CD

- ・Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S.BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
- ・Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)
- ・Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)
- ・Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)
- ・András Schiff (Piano) 1985 「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)
- ・高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
- ・田村宏 (Piano) 1989 「J.S.バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
- ・Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)
- ・Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)
- ・Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961 「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜1 「Sinfonia 8」 BWV 794 ①~⑭ (楽曲分析)

第1部
主題

①

③

⑤

⑦

⑨

第2部
主題

5度下カノン

K 完全終止

第3部 主題

Gv5 Gv6 Gv7

11

T a' a a' a

g: K 完全終止

13

T a a' a' a/ a/ a/

g: → d: K 偽終止 結尾

15

K 間奏2

d: → F: → B: 掛留

K 完全終止

17

主題 Tの二重化 T a' k T

B:

19

間奏3

B: → F: 主題 T a' k a' k a' k

21

主題 Gv9 Gv10 K

F: a T a' a/ a/

K 完全終止

譜2 「Sinfonia 8」 BWV 794 ①~②③ (演奏解釈)

Allegretto

① Tのクライマックス *mf* 最初のテーマのエコーのように

③ *mp* *cresc.* (*p*) エコー *mf* エコー (*mp*)

⑤ (*f*) (*mf*) エコー *dim.*

⑦ *mp* *cresc.*

⑨ 前半のクライマックス *dim.*

11

上声部と中声の動きを際立たせる

mp

cresc.

13

偽終止を意識して

mp

15

ほんの少々テンポをゆるめる

(p) エコー

(mp) *cresc.* *(mf)* *(mp)* エコー

エコーではなく主張する

17

全曲最大のクライマックス

f

cresc.

19

(p) *(mp)* *(mf)* *(f)*

(mp) *(mf)* *(mf)*

cresc.

21

上声部のテーマの直前の下声部のテーマのマルカートを受けついで

f

cresc.

下声部のテーマはマルカート気味

テンポをゆるめて堂々と